

心の音色 —ブラス

吟遊詩人
タカツキ Takatsuki

銅の色は何色？と聞かれたらあなたはどうか答えるだろうか？銅はさまざまな色をもっている。まず思い浮かべるのは馴染んだ10円玉や銅メダルのような赤銅の暖かい色。「青」を思い浮かべる人は化学に従事する人かもしれない。子供のころ理科や化学の授業で、普段馴染みの深い銅とよばれる物質が硫酸銅の結晶やイオン溶液の深く澄んだ青さで目前に現れたとき、驚きを感じた人も多いだろう。彫刻や構造物に従事する人であればブロンズや緑青といったもう少し緑が溶けた色を思い浮かべるかもしれない。

こと音楽に従事する者たちの間で最も馴染み深いであろう銅の色は「黄色」だ。黄色と言い切ってしまうとその色は本来の色から、ぱっとすり抜けてしまうが、子供達が絵を描くときトランペットやホルンのような「ラッパ」は黄色で塗りつぶされる。

トランペット、ホルン、クラリネットといったピカピカの金管楽器は、「真鍮」という銅と亜鉛の合金でできていることが多い、管楽器主体の吹奏楽がブラスバンド（真鍮の楽隊とよばれるのも、楽器の組成に由来するのだろう。真鍮が金管楽器や木管楽器のサクソフォンに使われるようになったのは、やはりその加工のし易さや外観の美しさとコストパフォーマンス、つまり手に入れ易さが他の金属や合金より優れていたということが大きい。もちろん口に加えて演奏するものだから人体に害がないことも大切だ、金属アレルギーの奏者のためにはマウスピースやリードの部分が木やプラスチックでできているものもある。

真鍮のような合金は銅と亜鉛の比率によってその色が変わるが、それで作られる楽器も素材の構成比によって音色が変わってくる。管楽器一般に赤

チューバ



サクソ



トランペット

みを帯びたレッドブラス（銅90・亜鉛10）は柔らかい音で、亜鉛の比率が上がリイエローブラス（銅70・亜鉛30）になればシャープな音色になると言われている。他にも洋白という銅・亜鉛にニッケルを加えた金属で作られる場合もある。19世紀頃ニューヨークでは黒人のブラザーやシスターの葬儀の際、「セカンドライン」という楽しいリズムの音楽がブラスバンドたちによって演奏された。ニューヨーク発祥のブラスサウンドは今日のジャズやファンク、そして巷で流れているあらゆるポップスサウンドや日本でもポピュラーになったラップ・ヒップホップ



ブラック・ボトム・ブラス・バンド
“Best!Best!Best!”



ダーティ・ダズン・ブラス・バンド

ブまで、殆どの音楽の血肉となり、根底に流れている音楽だ。今でも本場ニューヨークならダーティ・ダズン・ブラスバンドや日本ならブラック・ボトム・ブラス・バンドといったブラス・バンドで今も本物のセカンドラインを聞くことができる。

セカンドライン！葬式で大騒ぎ！という気分は判るようで判らないような心理状態だが、そもそもファーストライン・セカンドラインというのは葬儀の「行き」と「帰り」のことを指していたようだ。伝統的な葬儀の際ファースト・ラインつまり墓地へ向かうときは遺族や関係者が参列し、レクイエムのような悲しい音楽がやはり演奏される。さて、つづがなく葬儀を終えた後、帰り道、セカンドラインではうつつ変わって楽隊は陽気な曲をわつつ演奏

して、通行人を巻き込み、みんなで踊り町を練り歩き天国へと向かう個人の魂を祝福する。

2006年に僕の京都時代の恩師であった、市川修というセロニアス・モンクのような風貌のファンキーなピアノリストが急逝されたとき京都ではセカンドラインによる音楽葬が盛大に行われたそうだが僕は先生の訃報を後で知ったので参列することができなかったが、京都の空には陽気な真鍮のいななきが響き渡り、彼の棺は仲間にも担がれ踊るように町じゅうを練り歩いたという。

この哀楽が入り混じった状態というのが、ブラス・バンド以降の音楽のキモだ。ごくおおよそに述べると、真鍮の管や弦の楽器を用いる先人達は、セブンスコードやブルーノート音階といった今までのクラシック西洋音楽では用いられる事が無かった奏法を使うことで、悲しいだけ、楽しいだけでは表現しきれない心の機微を掴み、音楽の世界に新しい色彩を提案したのだ。「悲しいことがあつたって笑うんだよ。それが人生つてもんさ」とはブルーズをこよなく愛した市川修が生前教えてくれた言葉だ。心はさまざまに色をかえる、さまざまなる出来事が心に彩りを加える。純粹な金属のように混じりけのないものは柔らかいが弱い。青銅や真鍮のような合金が考えられたのはいつの事だろうか？自らのなかに複雑な感情を受け入れたとき、世界は柔らかなくしなやかに強く脈打つ。予想もしなかった美しい色や新しい音色が僕達の前に広がり、時間を経てなお洪い光沢を放つ。一つの出来事でさえ人それぞれ見ている角度でまったく異なる色で見ていることだ。時間を経てその色が変わることだ。あか、あお、きいろ、銅二つにしても僕はたくさん色を想い描いているのだから。

タカツキ

Takatsuki



ウッドベースを弾きながらラップするという世界でも類のないスタイルをもつ「ウッドベースの吟遊詩人」。彼の詩世界は「黒猫は眠らない」、「ほたる石くじら岩」など楽曲タイトルからも興味をそそられ、鋭い観察眼とあたたかいユーモアに満ちている。彼のラップスタイルもブルージューなどこか哀愁を帯びた声でラップの範疇を超え表現力豊かに世界を鮮やかに描き出す。学生時代に在住した京都の空気に色濃く影響され、ときおり京都独特の優しい関西弁や語彙で語りかけるのも彼の魅力の一つ。

タカツキバンド、SUIKA、サムライトループス、アイララなど様々なスタイルで全国ライブを展開。

特にフランス国内でも彼の人気は高く既にCDが流通され、WEBや紙媒体、NOLifeTV(フランスのMTV)でも大きく取り扱われフランスツアーも行われた。

また彼の魅力はHIPHOPや音楽だけの範疇に留まらず、瀬戸内寂聴「源氏物語」の朗読や、京都出身のシンガーソングライター「リクオ」がタカツキの「同じ月を見ている」をカバー、AHB(ア・ハンドレッド・ベース)最新アルバム「FADER JAPAN」の連載等、文筆家やイラストレーター他あらゆる方面でマルチクリエイターとして注目を集めつつある。

“世界遺産”、“僕らの音楽”等でSONY環境企業CF「BE SIMPLE」放送中
<http://nrecords.org>